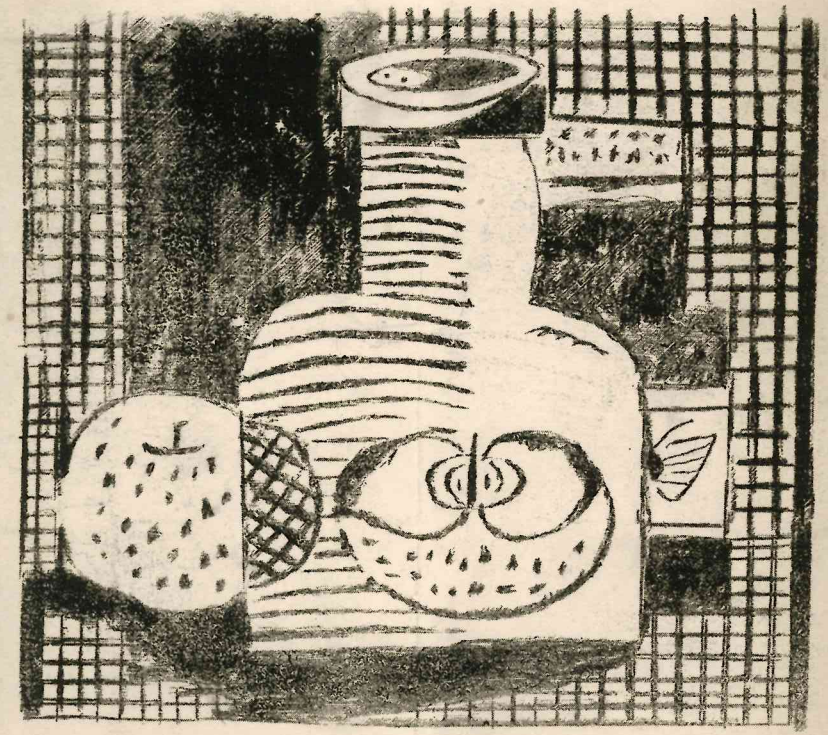
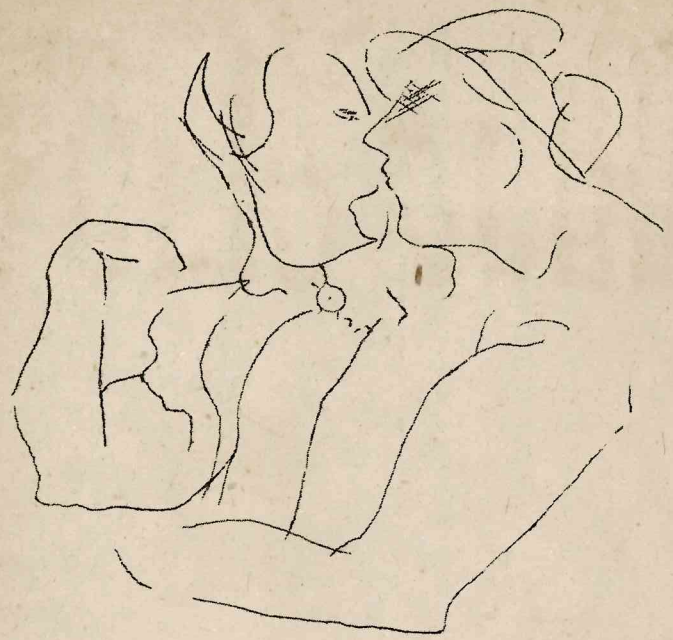
POETS' SCHOOL



14



詩人学校　第十四集

お前は私の目の前にいる……ふじの・かずを・2
この時代の神話……中川郁雄・3
秋……井上源一郎・4
部屋の中では……藤本英策・5
秋のおもい……中川いつじ・6
患者……浅野明夫・6
孤独なこおろぎ……田井中弘・7
泡……奥村美子・7
泪……田中克己・8
はつ秋……武田豊・9
僕自身の唄……猪野健治・10
初秋の郷愁……池田千代子・11
雲……錦織白羊・12
小猫……蒲良典・12
無題……廣田一彦・13
夏の比叡山にて……鈴木寅蔵・14
かみのマジック……眞野喜恵治・15
海鳴りの歌……井上多喜三郎・16

お前は私の目の前にいる

ふぢの・かずを

お前は私の目の前にいる
何故私は愛を語ろうとしないのか
それは私にもわからない
何時になったら人は幸福になれるか
ということがわからないのと同じように
お前は私の目の前にいて
憎しみや怒りや悲しみを與へる
しかし私はお前から逃れることが出来ない
苦しみの多い生から
私が去ることが出来ないのと同じように
お前は私の目の前を去る
時がお前を連れさるであろう
時はお前のすべてを連れさるであろうか
否、々、矢張りお前は目の前にいる
それは私に堪えがたいことなのに
お前は私の目の前にいる
愛と幸福とがシノニムであるなら
私達は此の世を飾るばらとなれように
神よ　何故お許しにならないのか
お前は私の目の前を去らないのに

Zの時代の神話

中川郁雄

ひろがり　のびあがり　ビルはごうぜんと
Zの時代の　空間を塗りつぶした。部屋ごと
に　ネクタイを結び　机に噛りついた　計算
器　タイプライターの　妥協を許さぬ　金属
性のアルペジオ。創造主人間であるぼくは
部屋を開め出され　追いたてられ　そびえる
ビルの　曲りくねった階段に　灰色を殘し
受難の歩みを続ける。世界の端に来たのであ
ろうか　ひからびた歴史の断崖に　人間が吐
き捨てた　絶望を啜って　燃えている　眞赤
な花をみた。狂るおしさ　花瓣を毟り　永遠
からもれる　はるかな　みどりのひかりに
投げかける。ひみつの　ぶあつい　モナリザ
のような　みどりの誘惑。爪立になり　みど
りのひみつを　掬おうと焦るのだが　あゝ
ぼくには翼がないのだ。

秋

井上源一郎

山ふところのサナトリアムには
白いコスモスばかりが咲いていた
乙女は一人バルコンで
すき透った
掌をかざしては
蜩の唄にぬれていた

シヤボン玉の歌

蜩をきゝながら
シヤボン玉を吹いている
香いひとよ

高原の秋

落葉松の林をぬけると
パットひらいた視野
まっ赤なセーターのお嬢さんが
一振したグラブがキラ、と光って
青い空に飛び揚る球
それを追って
白いホルシュタインが馳ける
おや
もう見えない
香くにちよっぴりとのぞいている
あの桔梗いろの山に
それとも
青い空に吸われたのかしら

部屋の中では

藤本英策

青くむくれた
歯槽膿漏患者の腔中に
悪臭が漂い
溜った膿汁に
無数の細菌が繁殖し
蹲り
骨髄を虫ばみ
伸縮し、蠢めいている。

吐く息の悪臭が
病室に満ち
芥溜の蒸された臭いと
下水の泥臭が呼応し
入り交り
家屋の内外を悪臭で杜す。

臥床の
薄黒いシーツは粘り
汗臭く病人に纏いつき
病人の目は
照りつける西日の光の中で
どよんだ空気の流動を
ぢっと眺める。

目ばかり大きな病人が
赤く爛れた腔中に
今日も又
呻吟を繰り返し
狂い無き冷徹のセコンドに
耳を傾け
青白き吐息をしつつ
一点を凝視め
生きている。
生きている——。

秋のおもい

中川いつじ

その三

口一杯に歯磨粉を含みながら
流れに映るちぎれ雲をみてゐると
世界が反転したように
朝の礼を交わす隣家の人が
未知の人のように新鮮で
別れた人のように懐しい。

その四

朝　眞白いカーテンにそよぐ
風の白さ　汚れのない風だ
あの残った月からか
連の湖からか
こぼさぬよう　そうっと
風を掬ってみる
すぎ去った日を掬うようだ。

患者

浅野明夫

田舎の医家は静かだ。
屋敷を取りまく五月の緑は
待合室で客の読む
新聞を明るくしていた。

土くさいお女将さんが
薬局の窓をのぞきこみ
時々よれよれのブラウスの袖で
汗をぬぐう

"はいお薬"と声がした時
女将さんの金入れを握った手が
かすかにふるえていた。

孤独なこおろぎ

田井中　弘

黒いプロフィルに刻まれた口マンを知りたい
昏い日の洪水の音と
ひびわれてゆく早天の地殻と
それらはマージやノラのように
視界をわずか横切る事もなく
はるかかなたに過ぎ去ってゆく

それにしても
わざわいを知らないわたしの体内に
ああ　昨日も今日も流れる
ひどく孤独なイメージよ

草むらの中で
私の
二つの巨大な生物が触れる
するとさらさらと露の音がして
ふと季節がすでに晩秋であるような
はかない錯覚が起って来る

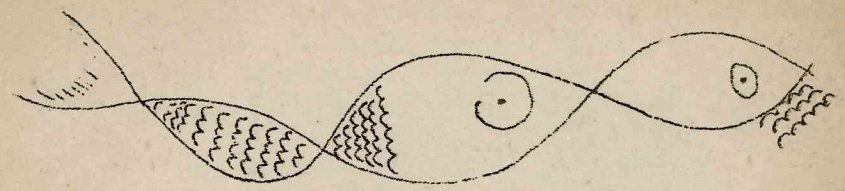
一九五一・九・五

泡

奥村美子

むくむくとカップにあふれる
ビールの泡を
「大変だァ〜〜!!」と
掌で受けとめた私でした

ビールの泡の一つ一つに
若いマヽの白い指が
ものを云はない唇が
つめたくうつっているのでした



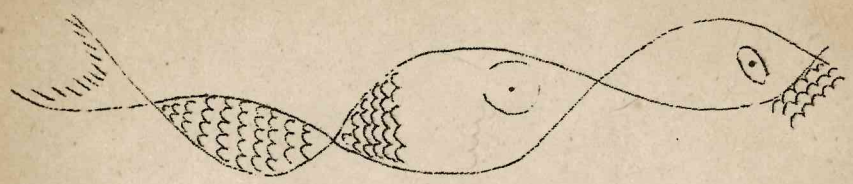
泪

田中克己

湖の岸
糸杉の林の下で
僕はおまへを抱いて永久をちかった

そのときおまへの頬を泪がつたった
「なぜおまへは泣いた」
僕がたづねるとおまへは
「わからない」と答へた

のちの日の悲しさを予知してか
永久のちかひをうそと思ったか
それとも子供のやうなうれしさでか
僕にもわからない
たゞおまへの泣いたことだけはいまもわすれない。



秋はつ

武田豊

小学四年生になる私の子供が
一泊二日の修学旅行に立つので
朝早く駅まで妻が送ってゆく

ぐっと肩にくい入ったリックサック
当座のおやつ袋だけ妻が下げて
表へ出ると
今日もいい天氣
はつ秋のきれいに晴れた空

門口に立っている私に
「行って来ます」と挨拶して出て行った
子供や妻のうしろを
黄金色の朝日が追っていた

もう子供はあんなに大きく育ったのか
妻もいいお母さんになって
くりっと朝日の方を向いて
私は大きい深呼吸をした

僕自身の唄

猪野健治

芸術
へん
人民革命
えへへへへ
学問
へっ
形而上学
ふっ

何もかもあっちへ行ってくれ
存在しているものはどいつもこいつもみないい
やだ

ハル
ナツ
アキ

フユ
俺の癇癪の程度が少しばかり違うだけだ
アタマノナカガコゲテイル
クチノナカガクサッテキタ
イキヲスイコムトゴミステバノニオイガスル
「存在しているものはすべて美しい」
ロダン氏

ボクワバカナンダロオカナア
ソレトモトンマナンダロオカナア

がふ　がふ　がふ　がふ
アゴがはずれた
たいへんだ
舌がちぎれた
たいへんだ
学問がなんだ
人間が永遠に死なない研究でもできたか
秋風は地上をレモン水の如く通りすぎ

カナカナ蟬は深山のふもとに小唄をならい
カワセミは小川のせせらぎに小魚をもとめ
ミツバチは花園に蜜をあさり

ああ　大臣も便所では尻をふかねばならず
税官吏も税金は拂はねばならず
新聞記者も新聞は読まねばならず

人生よ
エヘヘヘヘヘヘ！

初秋の郷愁

池田千代子

それはまことに鮮やかな　葉鶏頭の紅色であった
九月の陽ざしはまだ背に汗したが
新学期のたのしさと
爽やかな初秋のよろこびで

遠い野を行く疲れも覚えなかった
内藏助の岩間寺を　友と訪ねての帰り途
ふと　目を射た葉鶏頭
一瞬　息をつめて立ち止ったほど
それは　見事に燃え立つ葉鶏頭であった
別荘ででもあろうか
白い洋館のひっそりとした窓下であった

友はさとったであろうか
私の胸に　俄かに拡がった哀愁を
私は見たのだ
葉鶏頭をこよなく愛し
それを抱き乍ら　死んでいった従兄の顔を

あれから二十年
秋風と共に訪れて
郷愁のごと　胸ににじむ
目も鮮やかな　葉鶏頭の紅

雲

錦織白羊

雲が
蒼海のような空にうかんでいる
いつのまにか　ほぐれ
いつのまにか　結ばれゆく雲

雲には
夢がある
厳しい現実も
水々しい未来もある

雲は
嵐になると
どこかで　静かに
蒼海のような空を待っている

さく　さく　さくと鳴らしながら
草を食べている牛の瞳に
秋が映ると

雲は
眞綿のようだ
おゝ　いと呼ぶと
ぴん　ぴん　響くようだ

胸を病む友のいるサナトリアムの
薄の丘で
わたしは
雲を呼んでいる

小猫

蒲良典

右手をなめなめ
根氣よく顔を洗ってゐる

小猫よ
顔だけなんぼ化粧しても
尻尾の方は泥んこで汚れてゐるぜ

だけど小猫よ
誰れの膝にでも　抱かれるとすぐ
眼を細めて甘えるお前は
ほんとに可愛い奴だ。

『おや
お前の毛並は
黒と白とが斑になってゐるが
赤がちっとも混じってゐないね。』

貴女から贈られたネクタイ

貴女からプレゼントされた
美くしい縞模様のネクタイ。

あゝ
そのひとすじの絹布にこめられた
貴女の
柔かい愛情の感覚。

私は
貴女の愛を襟に結んだとき、
『幸福』に頭すじをこそぐられて
思はず鏡の中で微笑んだ。

無題

廣田一彦

兄　今　足下を憶ってゐる。
燃えあがる炭火を中にして
低く流れた声を忘れ得ない
家並の影黙く
山脊に稲妻が明滅してゐる
北の方を向いて
兄　今　足下を憶ってゐる。

夏の比叡山にて

鈴木寅藏

一、ケイブルカ

ベルが鳴ると私はケイブルカに身を托して、山腹の斜面を昇つて行った。樹々の蒼林を深閑として分け入る。時どき渓谷の蒼さをゆれつゝまたいだ。あたりは窓に蜩を聞くのみであった。語るべき友また佳き人もあろうに、誰とても言葉がなかった。それはあまりの縄壁の深さと樹々の迫る穂先に、想ひを封止められたのであろう。私は傾斜の窓に自らの位置を支へねばならなかった。やがて停留所の窓が開かれた。こゝには夏の陽が花咲き明るく肩に降る。その中を思い出したかの様に人々は呼び合って出て行った。

二、山　道

洋傘を杖に樹々のうつ蒼さの中を縫うて歩む。道みち羊齒の葉やどくだみの花が、私をさし招く。断崖の巨木に蔦かづらは歴史をからませて今も蒼い。私は千古の人の拓いた足跡を尋ねる。脚下の樹々の穂先を踏み乍ら。やがて峠を廻ると区切られた樹肌の間から、湖が蒼く光っている。そうして湖は私の心に明るく話し掛ける。いつしか手にしていた上衣を着込んでいる私に気付く。こず枝から時雨が来る。私は心よく肌身をぬらしつゝ木株に腰を預けて、山雀や啄木の鳴き渡る行方に憶をしばし貸す。ふと眼下の木樹の穂先から、はひ上る様に蜩がさわぎ鳴く。私はそのあたり谷間の堂の朽た屋根の青草の祭りを見た。更に断壁を埋める樹々の枯枝葉の蓄積が世の栄枯を私に語る。私は自らうなづくのであった。その下にも祖先の日歴が眠れることを：……。

一九五一、八、一五。

かみのマジック

眞野喜惣治

かみに足が付くとまたたく
誰かのために誰かの力で。
かみがうづめるかみの上の活字

かみがふりまく空中の振動
昨日多くの目がやられた
多くの耳がうたれた。
かみが燒かれた夜明け
目はまどもになり
耳はすむだかと思はれた。

今日
まつ先にかみにのせられた耳と目
あやつられてゐる水銀の小粒。
かみに穴をあける目
かみ彈をはじく耳
七つの海の拍手
立ちん俸。

海鳴りの歌

井上　多喜三郎

明るい月の夜毎でした
東方の山脈を越へて
おしよせてきたはるかな海鳴り
富坪の高原に
とらわれていた僕の
郷愁の脊を
かなしくぬらす
メロディでした

ようやくの復員に
僕は雀躍して
母国の土を踏んだのだが
うようよしている闇屋やパンパンなど
たちまち善意はとまどった
眞実僕はとまどった

なつかしい日本は何処へいったのか
一銭九厘のあめ玉や鳩笛は

失意の僕に
くるしい生活がはじまった

やせこけた僕の脊は
おもいでの海なりをききながら
日本の昧爽をまっている

昭和二十六年九月二十三日発行
五〇部限定　（価四〇円）
編集者　井上多喜三郎　滋賀縣蒲生郡老蘇村西老蘇
印刷所　文童社　京都市東山区内南梅屋町二〇六
発行所　近江詩人会　滋賀縣（武佐局区内）西老蘇　井上多喜三郎方